
ミルクキャンディ

日向 銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルクキャンディ

【Nコード】

N3220D

【作者名】

日向 銀

【あらすじ】

私の友達に彼氏ができた。けれど、私はどうしても喜ぶことができなくて……。この胸の痛みは何だろう。イチゴキャンディ、レモンキャンディの続編。

（前書き）

イチゴキャンディ、レモンキャンディの続編です。

「夕陽先輩」

1年生で学校一のイケメン。

そんな彼が、私に声をかけるなんて極稀なこと。

「あら…、れん君から声をかけてくれるなんて光栄だわ」

「おねーさん、どこ？」

綺麗な顔を目の前にテンションの上がつたミスターな私をそっちの
けで、れん君はあたりをキョロキョロ見回した。

おねーさんとは私の親友のことで、彼と付き合いだしたのはごく最近のこと。

「しぐれなら、さつき食堂で元嶺と早食い対決してたわよ」

私は負ける試合なんてしない主義だから、抜け出てきたけど。

「元嶺…？」

「そ。仲の良い男子」

「ちっ」

れん君はイライラした様子で、走り去った。

そんなにしぐれが好きなんだね。

私は後ろ姿を複雑な心境で見送った。

元嶺はしぐれが好き。

前にそんな事をうつすらと彼の口から相談されたから。

でも、れん君には言わなかった。

うつん、言えなかった。

しぐれの親友として、元嶺の親友として、嬉しいような寂しいような。

れん君としぐれは上手くいってほしいけど、元嶺だって友達だから。

しぐれはずるいや。

私だって

「愛されたいな…」

「誰に？さっきの少年に？」

「ひはひっ」

急に後ろから頬をつかまれて、つねられる。

痛い、と叫ぶのが言葉にならず、何ともマヌケな声が出た。

それを聞いて、腹を抱えて笑っているこのガキみたいなのが元嶺。私としぐれと仲の良い男子。

「何すんのよー…、それより、あんた早食い対決は？」

「だいぶ前に終わった。俺の圧勝でな！」

満足げにふんぞり返って、ケタケタと笑う。

馬鹿馬鹿しい。

女子相手に何を向きになってんだか。

そう思いつつ、何故か顔には笑みが浮かぶ。

それがバレないように、私は軽く俯いた。
だって嫌じゃない。

こんな馬鹿話で笑っちゃうような女って。
そんなのモテないもの。

「あ、そう」

心底馬鹿にしているように私は言った。

「冷てえな」

口を尖らしてスネる元嶺を横目に、私はれん君に言った言葉を思い出した。

「あ！れん君に嘘教えちゃった」

「良いんじゃないの？ほつとけば」

「ダメに決まってるじゃない！」

私は階段を駆け下りた。

食堂にはしぐれはいないって伝えなきゃ。

「俺も行くー！」

「何であんたが来るのよ！」

れん君が嫌いじゃないの！？

わざわざ見に行く必要ないと思う。

そう内心では思いながら、一度言い出したら聞かない彼の性格から

して、言っても無駄だろうとため息をついた。

「別に良いだろ。あ、ほら少年発見」

私は元嶺が指さした方向を見た。

そして走っていた足をゆっくり止めた。

「あ、なんだよ。しぐれに会えたのかよ。疲れたのに、走った意味ね」

だから止めたのに。

こんなの見たら元嶺傷つくのに。

しぐれもしぐれよ。

元嶺の気持ちに気づいてあげてよ…。

しぐれは美人だし、性格良いし、最高の友達よ。

でも、でも…

私は元嶺の傷ついた気持ちを考えるだけで、胸のあたりをしめつけられた。

元嶺も元嶺だわ。

気持ちを伝えてしまえば良いのに。

いつまでも報われない思いなんて。

そんなの、悲しいじゃない。

「何黙ってんだ」

「何でもないわよ」

涙腺が緩むのを、下唇を強くかんでこらえた。

「私…、帰る」

痛い胸をおさえて小さく呟く。

「え、おい。5限は？」

「…教室に、帰るの！」

度胸ないな…。

授業サボるなんて、私にはできない。

私は元嶺のことが見れず、足元をただひたすらに見つめた。
顔を上げれば、きつと元嶺の無垢な笑顔があるだろう。

けど、今の私は、それにさえイライラしてしまいそうだから。

「お前、度胸ねえな」

「……………うるさいよ」

さつき駆け下りた階段をゆっくりとのぼった。

元嶺は何も言わず、ゆっくりと後ろをついて歩いている。

ねえ、私はひどい？

最高の友達に彼氏ができて、喜んでいるのに。

私は元嶺に自由になってもraitたい。

無理に笑わないでほしい。

1段1段敗北感のようなものを感じながら、教室を目指した。

放課後、私は元嶺が遊ぼうと誘ってきたのを断り、1人で中庭に腰掛けた。

「夕陽先輩」

私の頭上から降ってきた言葉に私の体は過剰に反応した。
何かを張り詰めていたからかもしれない。
私は慌てて声をかけてきた人を振り返った。

「な、何だ…。れん君か。どうかしたの？」

「別に。隣良い？」

「んゝ。良くないかな。しぐれに怒られるしね」

って言ってるそばから横に座って、れん君はあくびをしてる。

「何しに来たの？」

「別について言っただじゃん」

私はため息をもらした。

「れん君、しぐれを泣かしたらただじゃおかないんだからね」

「言われなくても」

そう言っただけ、れん君は物思いにふけっていた。
しぐれの事を思い出しているのだろう。

いつもポーカークフェイスの彼が、優しく笑ったのだから。

「私が不幸せなぶん、しぐれは幸せでいてほしいの」

しぐれを妬むなんて気持ちはうまれない。

私はしぐれが大好きだから。

ただ、虚しいだけ。

元嶺の気持ち、私には痛くて。

「夕陽先輩が不幸せ？」

どこが？とも言いたげな視線に私は苦笑した。

「何よ、私だっていつも騒いでるわけじゃないのよ？」

「何が不満なの。この学校？」

「それはれん君でしょ」

だったら何が？と聞いてくるれん君に、私はたじろいだ。

れん君の彼女のことを好きな男子、そう、元嶺の気持ちを察して胸が痛い、だなんて言えそうになかった。

目をそらして黙り込む私を見て、れん君は何も言わなくなった。静かな時がながれる。

こういう沈黙が苦手な私は、必死に話題を探した。

「元嶺とかいう奴という時、夕陽先輩そうやって話題探す？」

心中の人物の名前がれん君の口から出て、私はぎょっとした。一呼吸して、私は口を開く。

「んー…どうだろ。あいつは常に喋ってるし」

「夕陽先輩は不幸じゃないよ、それに本音って大切だと思う。あと

勝手に解釈しないこと」

何を言ってるんだろう。

私は頭をかしげた。

もしかして励ましにきてくれたのかな。

そうだとしたら、嬉しいな。

「ありが―…」

「おい少年。てめえ俺の女に手出すなよ」

「元嶺!?!」

元嶺が中庭に面する2階の廊下の窓から顔をだした。

「あんたの女じゃないじゃん」

れん君は私を一瞥して、元嶺を睨み付けた。
何ともいえない空気が漂う。

「夕陽は今から俺の女になるんだよっ!」

そう言つて、元嶺は窓から身を乗り出し、飛び降りた。

ズダーンという重い音と同時に「いって〜」と元嶺は小さく声をも
らす。

「バカじゃないの。じゃ、夕陽先輩、俺行くから」

「え? あ、うん。ありがとうね」

私はれん君の後ろ姿に大きく手をふった。

「ゆーっひー！」

そう言つて元嶺は私の肩に肘をかけて、小さくなつたれん君の後ろ姿を一緒に見送った。

私はれん君の言つた事を考えながら、元嶺の方にふりかえる。

「なに…？」

「お前俺との約束断つて…まさか…親友の彼氏と浮気するなんて」

「してません！」

私は、私よりも高い位置にある元嶺の目を睨みつける。

「俺というものがありながら」

「何それ、ドラマのセリフ？」

「俺のところに帰っておいで」

「くさいつてばー！」

私は笑いながら、元嶺の肩を叩いた。

いつもならすぐに返ってくる笑い声が、今日は一向に返ってこない。不安になった私は、元嶺の顔をのぞき込んだ。

「もと…み…ね？」

彼の顔は今まで見たことがないまでに真剣で、そして少し切なそうだった。

「わかってねえな。俺がどれだけ夕陽の事が好きか」

唸るように告げられた言葉に、私の顔は一気に熱をもつ。
好きって…。

「だってあんた、しぐれの事が好きなんじゃ…」

「俺はずっと夕陽が好きだった！」

何を言ってるの。

彼の言葉が頭で木霊して、クラクラする。

「だって、前言ってた！俺、しぐれが好きだって」

「俺しぐれが好きだ」

彼はそこで一旦言葉をとめて、頭を掻いた。

「友達として。夕陽の事は本気で好きだって言おうとしたら、お前が勝手に納得して…」

私は思い出していた。

しぐれが好きだと聞いた私は、彼が次の言葉を発する前に、応援するよ！と笑顔で言ったことを。

その時から、胸がズキズキと痛むようになったことを。

「そんなの…私最低じゃない」

「そうだそうだ！今頃気付いたのかよ？俺がどれだけ胸を痛めてきたことか…」

「ごめん」

心からの謝罪。

今までそんなに傷つけてたなんて、私知らなかった。

「それってさ、どっちのごめん？」

彼は首をかしげて不安そうにこちらを見る。

「俺と付き合うのは無理っていうごめん？それともー」
「違う！」

私はとっさに出た、自分の声の大きさに驚いた。
違う、違うの。

「やっと気付いたの。私元嶺が好き」

……………言った。

胸がズキズキしてたわけを、やっと気付けたの。

「気付くの遅すぎだろ」

大きなため息をもらし、しゃがみこむ元嶺の横に、私もしゃがみこんだ。

「夕陽、ミルクキャンディあげる」

「……………は？」

「記念日には飴をあげろってしぐねが言ってた」

そういうことか。

私たちの記念日は、ミルクキャンディ味ってことね。

「甘ったるい感じするわね」

「俺は好きだけど」

「私だって」

2人でクスツと笑えば、綺麗な夕日と同じ色に頬を染めて、手をつないで帰った。

（後書き）

長くなってしまいました。

グダグダしてるなー…

と反省したり。

でもキャラ的には、れんより元嶺の方がしつかりたってる気がする…？笑

キャンディの話はこの3つで終わりました！（たぶん）

3つ読んでくださった方、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3220d/>

ミルクキャンディ

2010年10月16日07時57分発行